

日本精神保健社会学会

平成 25 年 6 月 30 日

THE JAPAN ASSOCIATION OF
MENTAL HEALTH SOCIOLOGY

事務局：東京都豊島区西池袋 2-39-8
ローズベイ池袋ビル 3F

<日本学術会議学術研究団体 No. 1001>

東京メンタルヘルス株式会社内

TEL 03-3986-3220 FAX 03-3986-3240

ニュースレター第 48 号

発行人：宗像恒次 編集人：上田敏子、窪田辰政

第 19 回日本精神保健社会学会学術大会に向けて



第 19 回学術大会実行委員長
帝京大学理工学部准教授 滝澤 武

本学会も、第 19 回。来年は、節目となる 20 回を迎える。これまでの 19 年間の大会テーマを整理してみた。

- 第 1 回（1995 年）「幸せになれない日本の仕組み」
- 第 2 回（1996 年）「組織マネジメントとメンタルヘルス－癒しのリーダーシップ」
- 第 3 回（1997 年）「いじめとメンタルヘルス」
- 第 4 回（1998 年）「選択的共同社会の光と影」
- 第 5 回（1999 年）「自分を愛せない子供たちから学ぶ ～社会のアノミー化と自立の病～」
- 第 6 回（2000 年）「生きがいと抑うつ・呆け防止 ～自己喪失の社会学～」
- 第 7 回（2001 年）「壊れること、すくわれること ～いまどきの絆を考える～」
- 第 8 回（2002 年）「トラウマ ～心傷体験の社会的伝達～」
- 第 9 回（2003 年）「うつ、ゆるぎのない愛をえる苦しみ ～スピリチュアルサポートネットワークの構築へ～」
- 第 10 回（2004 年）「大学生のメンタルヘルスとサポートネットワーク」
- 第 11 回（2005 年）「愛着が根づく社会を考える」
- 第 12 回（2006 年）「見えないつながりの信頼 マニュアル社会を問う」
- 第 13 回（2007 年）「あるがままの自己を支える社会づくり」
- 第 14 回（2008 年）「笑顔のある社会を作りたい ～孤独型自立からコミュニケーション型自立へ」
- 第 15 回（2009 年）「満足を実現する社会 ～焦りのキャリアから、スローキャリアへ」
- 第 16 回（2010 年）「メンタルヘルスの成長アプローチ他者報酬型社会から自己報酬型社会へ」

第 17 回（2011 年）「立ち直れる社会の条件」

第 18 回（2012 年）「自己肯定を支える社会」

その時々社会状況をふまえ、学会としてテーマを設定し議論してきたことがわかる。

本年度のテーマは「見通しの立たない時代のメンタルヘルスー自己探求と愛情の絆の時代へ」とした。私たちをとりまく国際社会。たとえば日中関係にしても、「従軍慰安婦」「靖国神社」「強制労働」「戦後補償」などの問題が紛争や緊張を生み出している。経済状況は、昨年 11 月には日経平均株価が 8800 円だったものが、今年になって一時 1 万 5000 円を超えるなど回復しているが、不安定である。デフレ脱却と経済成長を図るための大胆な金融緩和、軌道的な財政政策、成長戦略が今後どのような影響を及ぼすか、今後の見通しを予測するのは難しい。福島原発事故による環境影響にしても見通しはたっていない。

このような時代におけるストレスは、私たちのメンタルヘルスに影響を及ぼす。しかし、その影響を通じて、自分自身の世界観や人生観が問い直され、私たちがどういけばいいのか、どんなキャリアをつくるのかといった自己探求や愛情の絆が求められる社会でもある。

このような問題意識のもとに、うつ、引きこもり、障害などを手がかりに、議論し、交流できる学会にしたい。是非、多くの方に参加していただき学会を盛り上げていただきたい。開催日が 12 月 1 日と例年よりやや遅くなりますが、関係者への広報をお願いしたい。

第 19 回日本精神保健社会学会学術大会・総会のお知らせ（第 2 報）

●開催日：平成 25 年 12 月 1 日（日） ※日程が変更しました！

●会場：筑波大学東京キャンパス 119 講義室

●大会テーマ：「見通しの立たない時代のメンタルヘルス」

今日、政治経済面だけでなく、安全保障の面からも、自然環境においても、見通しの立たない時代の中にはいり、私達がどのように生きていけばいいか全く予想がつかない時代がきている。このような時代のストレスは、私達のメンタルヘルスに直接悪影響を及ぼすが、その苦しみや痛みを通じ、自分のこれまでの世界観や人生観が問い直され、私達がどう生きればいいのか、何をしたいのかという自己探求や愛情の絆がもとめられている時代でもある。

第 1 部 一般演題発表

第 2 部 シンポジウム

「見通しの立たない時代のメンタルヘルスー自己探求と愛情の絆の時代へ」

司会 宗像 恒次（情動認知行動療法研究所 筑波大学名誉教授）

1. 組織依存のキャリア病、うつ—自己依拠のキャリアへ

栗原 壯一郎（（一般社団）オリエンタル労働衛生協会 メンタルヘルスマネジメント・サポートセンター所長）

職場に心を病む人は多い。大きく様変わりする時代に、自らの立ち位置が見えなくなったことにその誘因を感じる。自らの姿を第三者の評価尺度に委ね、自己の確立をないがしろにしてきた結果か？そうした時代のメンタルヘルスを社会的な視点で掘り下げてみたい。

2. 家族の見通しがつかなくなる病、引きこもり—あるがままの自己へ

武藤 清栄（東京メンタルヘルスアカデミー所長）

ひきこもる若者たちの多くは、親からの価値観の押しつけや仲間からのいじめにより、周りに対して不信感を抱き、それを般化させた結果、自分の人生に見通しがたたなくなった状態といえます。この打開策を考えます。

3. 障がいと自己報酬—私を支えた研究

殿山 希（筑波技術大学保健科学部保健学科鍼灸学専攻准教授）

11歳の時に視覚に異常が生じた。病名がついたのは18歳だった。28歳の時、鍼灸マッサージの道に入った。たくさんのあきらめと新たな希望。不満と苛立ち、悲しみ、私の思い…。今一度、自分の道を考えてみたい。

討議者 畠中 宗一（大阪市立大学教授）

★一般演題募集★

発表希望者は演題名を **9月30日(月)**までに事務局へお申込みください（FAX または郵送にて）。抄録については、**10月31日(木)**までに事務局まで提出してください。

（抄録枚数：A4用紙1枚程度 書式：タイトルは中央揃え、氏名（所属）は右寄せ、本文の構成については特に指定はありません。）

機関誌「メンタルヘルスの社会学 Vol.19」の原稿締切延長のお知らせ

「メンタルヘルスの社会学 Vol.19」の原稿締切日が**8月16日(金)**に延長しました。年報編集委員会では、会員の皆様からの原著論文を募集しております。また、総説、研究報告、実践報告、短報、研究ノート、資料等もお待ちしております。論文の書式は年報の執筆要項をご覧ください。なお、タイトル、抄録の英文についてはネイティブチェック（専門校閲）を必ず受けるようお願いいたします。多くの会員の皆様からの投稿をお待ちしております。

本学会では、東日本大震災後、ホームページにて災害メンタルヘルス対策について広報活動を行って参りました。また学会研究事業として、「福島第一原発住民精神健康調査委員会」を立ち上げ、原子力発電所が設置されている福島県の住民を対象とした健康調査を実施し、効果的な支援の方策を検討すること目的に活動を行っております。

健康調査は、震災から1年3カ月が経過した2012年6月以降、棚倉、久之浜、白河、南相馬と、延べ146名の方々にご協力いただきました。調査にご協力いただいた皆様に心より感謝申し上げます。なお、本調査の第一報は前回の学術大会において「東京電力福島第一原発からの距離別・気質別にみた不安と不眠」と題して報告いたしました。調査には、精神健康調査の他、自由記述もあり、多くの方々から貴重な声を寄せていただきました。これまでの調査結果については、今年度の年報（メンタルヘルスの社会学）にて報告する予定です。今後も継続的な調査および支援活動を行ってまいります。

熱風 ～理事たちの現場～ Vol.9

学生のメンタルヘルス向上を目指して

上田 敏子（東洋学園大学）

現在私は非常勤講師として大学で務める傍ら、研究活動や本学会の理事としての活動を行っています。

1. 研究活動

昨年、筑波大学大学院人間総合科学研究科ヒューマン・ケア科学専攻にて博士号を取得しました。本専攻は、教育、福祉、看護、医療、カウンセリングなど11分野からなり、「人」をキーワードとして様々な専門分野の先生から指導を受けることができました。

博士論文では、「養育者の表情イメージ表象の変容に着目したユニバーサル介入タイプの抑うつ予防プログラムの検討」と題する研究をまとめました。そもそもの研究の原点は、知り合いをうつ病により亡くしたという経験に遡ります。何か自分にできることはなかったか、という無念の思いが「抑うつ予防」という研究テーマを導くきっかけになりました。論文では、大学生の不安気質や執着気質の発現認知が、ネガティブな自己イメージ脚本や精神健康度の悪さと関連があること、また養育者の表情イメージ表象や養育者からの支援の認知が自己イメージ脚本、精神健康度に影響を与えることを報告しました。また、女子学生を対象とした介入研究では、養育者の表情イメージ表象を笑顔で穏やかなイメージに変えるイメージ法を行いました。その結果、学生同士でイメージ法を行った群において、

自己イメージが良好になり、特性不安や抑うつ得点が低下しました。これらのことから、本イメージ法が抑うつ予防の一手法としての効果が示されました。現在、これまでの研究成果を学術雑誌へ投稿しています。多くの人々に参考にしてもらえる論文を執筆し、今後も新しい知見を積み重ねていきたいと考えています。

2. 教育活動

大学では、健康管理学や公衆衛生、健康教育法の講義科目と実技科目を担当しています。講義のなかでは、遺伝的気質について取り上げることがあります。生まれもった遺伝的気質の特性や自己対処法などについて、宗像会長の「気質コーチング」を参考に授業を行っています。実際、学生からの評判は非常に良く、「自分の性格をよく言い当てている」、「参考になる」という声をよく聞きます。学生自身の自己理解を深める一助となれるよう、今後も授業で実施していきたいと考えています。

昨年からは、保健体育の教員養成課程の授業も受け持つようになりました。様々な課題を有する教育現場において、教員自身のメンタルタフネスが一層求められています。その点においても、気質と上手く付き合うことを学ぶ機会は重要といえます。今後も学生自身の成長をサポートし、ストレス耐性の高い人材の育成に努めていきたいと考えています。

3. 今後の目標

昨年、学会研究事業の一環で福島県いわき市を訪問する機会がありました。被災地で地元の方々と交流できたことは貴重な経験となり、それがきっかけでボランティア活動にも参加するようになりました。今後もこうした活動を継続しながら、社会の一員として何ができるかを常に問い、行動できる人であり続けたいと思います。